A-9

新カリキュラムにおける初修外国語教育の基本方針とその成果

The basic policy and its results of the second foreign language education in the current curriculum

○中川浩[1]，周一川[1]，郭海燕[1]，柳武司[1]，時田伊津子[1]，石部尚登[1]
*Hiroshi Nakagawa[1],Yichuan Zhou[1],Haiyan Guo[1], Takeshi Yanagi[1],Itsuko Tokita[1],Naoto Ishibe[1]

The office of the second foreign language has developed a basic policy according to the current curriculum.　The basic policy has three pillars.
① to set attainment targets based on foreign language Proficiency tests.
② to build available e-Learning systems for all the learners
③ to make new courses in connection with cross-cultural understanding.
We will introduce the concrete measures we have taken in the past four years and the next assignments to finish.

1　新カリキュラムにおける外国語科目の変更点

平成 20 年度から導入された理工学部の新カリキュラムにおいて，卒業に必要な単位数が外国語科目として 10 単位であるという大枠は，それ以前のカリキュラムと変わっていない．変更になった点は，外国語科目がすべて半期科目となりそれぞれ 1 単位となったこと，また外国語科目のうち英語は必修科目 4 単位を含めて 6 単位まで履修することとなり，残りの 4 単位が英語，ドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語の中から任意に選択することになったことである．英語以外のドイツ語，フランス語，中国語，ロシア語（いわゆる初修外国語科目）は，それまでの 2 単位必修という枠がなくなり英語の履修だけでも卒業することが可能となった．

このようなカリキュラム上の変更は，卒業後の社会において英語の運用能力がますます重視される趨勢にあることを考慮した結果ではあるが，同時に現在の教育制度では，英語以外の外国語を学習できる機会が事実上大学をおいてほかになく，多くの学生にとって大学における初修外国語教育がその最初にして最後の機会であることもまた忘れてはならない事実である．社会がますますグローバル化し，さまざまな国や地域の人々とのつながりが深まり，人としてコミュニケーション能力が問われている現在，国際的な視野や異文化に対する理解力を涵養することはこれからの社会人にとって不可欠のことである．そのため理工学部においてもこれまで通り，英語以外の外国語を学習する機会と方法，手段が十分確保されるべきである．このような観点に立って初修外国語研究室では，新カリキュラムにおける教育の基本的な方向性を次の三つの柱として掲げることにした．

2　三本柱とその具体化

三本柱とは以下の３点である．
① 各語学検定試験の基準に則り，科目ごとの具体的な到達目標を明示する．
② 履修者全員に各言語の e-Learning を利用可能にし，語学力の強化をはかる．
③ 関連する異文化理解科目を併設し，言語への興味・理解を深める．

①の語学検定試験の基準に基づいて学習の到達目標を明示することは，非常勤講師をも含めてすべての担当教員間の共通理解としてシラバスに記載し，また学生にもガイダンス時等で周知している．それのみならず，実際それぞれの検定基準に合致した学習成果を挙げていること示すためにも，また大学における教育の質の保証（いわゆる出口保証）という観点からも，各言語の検定試験にチャレンジすることを（あくまで学生の任意としてではあるが）推奨している．その結果過去 4 年間では図 1 のような合格者数を出すことができた．検定試験を受験し外部機関による認証をうけると

１：日大理工・教員・一般

	受験者数			合格者数			合格率		
	独検	仏検	中検	独検	仏検	中検	独検	仏検	中検
平成 24 年度	120	107	449	89	53	355	74.8%	49.5%	79.1%
平成 23 年度	117	73	489	85	52	348	72.6%	71.2%	71.2%
平成 22 年度	246	137	578	159	90	337	64.6%	65.7%	58.3%
平成 21 年度	212	131	422	172	104	255	81.1%	79.4%	60.4%
合計	695	448	1,938	505	299	1,295	72.7%	66.7%	66.8%

図 1

いう具体的な到達目標を設定し学習を進めることは，通常の授業に対してもより意欲的な態度で臨む学生が増えるという結果にもつながっている．研究室としては検定試験を受験する学生をサポートするため，「検定試験対策業座」を情報教育研究センターの協力のもと毎年開催している．

②の e-Learning の利用に関しては，時間数が限られている正規の授業を補完するため，また個々の授業の枠を越えて学生が共通に利用できる教材を提供するため，初修外国語研究室の教員がこれまで協同で継続的にソフトウェアの研究，開発，制作を行ってきた．それがドイツ語では「e-Learning Deutsch（100 語で覚えるドイツ語）」として，中国語では「中国語講座」という独自ソフトウェアとして結実し，その後もさらに継続してコンテンツの充実，拡張に取り組んでいる．e-Learning の利用方法などについては入学後の科目ガイダンスにおいて説明を行っている．これらのソフトは一部授業の中でも利用し，また例年 10 月に開催している検定試験対策講座のなかで，模擬検定試験問題として利用している．フランス語に関しては，これまで検定試験対策問題が一部 e-Learning で作成されてきたのにとどまっていたが，現在文法なども含めた本格的なソフトを担当教員が作成中である．

③の異文化理解科目としては，総合講座として「比較文化論―東洋と西洋」を両校舎に開設している．また教養ゼミのなかでも関連科目を設置している．

4　今後の検討課題

e-Learning ソフトのプラットフォームとしては，これまで情報教育研究センターの協力のもと WebClass を利用している．それに加えて現在，新たに LMS として Glexa の運用を試験的に開始しその有用性，効果などについても検討を行っている．

三本柱の②で掲げたように，学部生や短大生，あるいは大学院生も含めてすべての学生が誰でもいつでも利用できるような e-Learning 学習環境を整えることは，とりわけ初修外国語学習においては重要であると考えている．しかしながら現状では，すべての授業において e-Learning を導入し e-Learning にアクセスする機会を学生に提供することは事実上 CALL 教室や演習室の部屋数から言っても不可能である．したがって授業の中で e-Learning に接する機会がない場合でも、履修者であれば誰でも容易に e-Learning にアクセスできるようなシステムを用意し、提供することが必要となる．その点 Glexa のような LMS を導入することで，問題作成などの点で教員間の連携もはかれ，学習者に利用しやすい学習環境を提供できるのではないかと、その有効性を検証しているところである．今後，安定した e-Learning 学習システムを構築することができれば，共通した教材，共通した課題を配信するシステムとして正規科目の一部に e-Learning を組み入れることが可能となる．

5　謝辞

初修外国語研究室がこれまで各言語の教育や研究を推し進めるに際して，情報教育研究センターから長年にわたるさまざまな形での支援があったことは忘れてはならない事実である。それなくして本研究が成果を生み出すことはなかっただろう。また英語系列の e-Learning 研究グループからの支援や協力も忘れることはできない。あらためてこの場で感謝を述べておきたい。